「奥村鉱業所常呂鉄山随想記録」（抜粋）　植松茂

『ところ文庫15　常呂町郷土史話2』（平成12年3月発行）掲載

私は昭和18年1月より奥村鉱業所常呂鉱山に事務職員として就職しました。終戦まで勤務しておりましたので、その間の鉄山の運営状況について記憶に残っていることを書いておきたいと思います。

鉄山は昭和16年に鉱主奥村弥一郎氏によって始められました。鉱主は東京在住の人で日鉄から鉱区を譲り受け、来村して調査及び採掘を始めたのです。

当時日吉に住む鈴木健次郎氏が鉄山の総主任として勤務しておりました。

鉱石の搬出についてはトラック2台で常呂駅まで搬出し、鉄道輸送で室蘭製鋼所へ送っておりました。鉱石の含有率については鉄分30～50％、マンガン15～20％、石灰11％くらい含有しており、鉱石名については「含マンガン赤鉄鉱」というものでした。

ほとんどが露天掘りの採掘については、主として朝鮮人で、親方が数十人の人夫を連れて飯場を営み、何々組と呼ばれ、その数7～8組くらいあったように思われます。仕事の要所要所には日本人が係員としてついておりました。

昭和17年ころから軌道の敷設工事が始まり、鉄山から共立駅までは路面を新規に作り、共立から常呂駅までは国鉄の路床を使い、常呂駅土場まで搬出する計画で着工し、秋には完成しました。蒸気機関車3台、ガソリンエンジン車1台、計4台で輸送に当たりました。軌道が開通する以前は、夏はトラック、冬は各農家の人々による馬そりでした。この頃には鉄山も拡張されて従業員も約300人くらいになりました。

昭和16年12月大東亜戦争も始まり、昭和17年には軍需物資の調達に必要な軍需省ができて、鉄山もその指定を受けて国の重要鉱山となりました。鉱山に必要な物資などは優先して求められるようになり、必要資金も国から直接来るようになりました。（略）

鉄山もだんだん軍事化のようになり、規律ある行動に変わり、夏期朝7時、冬期は朝8時に就労者全員集合して朝礼を行い、鉱山長の訓辞などを受けてから就労するようになり、終戦まで続きました。（略）

奥村鉱業所常呂鉄山では終戦を機に廃山となり、鉱主並びに鉱山長は東京に帰りました。（略）

＊昭和16年6月　常呂鉱山でマンガンの新鉱脈発見

＊軌道開通　昭和18年10月9日　奥村常呂鉱山軌道開通式挙行（当直日誌）

本日正午より奥村常呂鉱山の軌道開通式。校長が招待を受け参列。午後5時より日吉小学校で祝賀会余興開催、満員盛況（日吉小学校沿革史）